

アフタヌーンティー

C h i s a t o & S b i o n

伊東悠香

Yuka Ito

Eternity



エタニティ文庫

目次

アフタヌーンティー 5

書き下ろし番外編
恋のマカロン 299

アフタヌーンティー

プロローグ

ゴールドエンドロップ……ティーポットから落ちる美しい餡色あめいろの一滴。

私が紅茶の魅力に気づいたのは、まだ小さい頃……小学一、二年生くらいだろうか。あまりに昔のことだから、記憶も曖昧あいまいになっている。

それでも当時の思い出は、特別なもの。きらめく記憶のページとして、心の中に大切にしまひこんでいる。

あの頃、私は友達が少なく、近所にも一緒に遊べる子はいなかった。家で本を読んでいることが多かったけれど、母にけしかけられて、近くの公園に一人で遊びに行くこともあった。

ある日、私はその公園で、犬の散歩をしている少年と出会った。

「バロン！」

愛らしいビーグル犬をそう呼んでいたのは、優しい笑顔が印象的な少年。私は彼を「お兄ちゃん」と呼んで慕っていた。

「お兄ちゃん！ 今日遊べるの？」

公園でお兄ちゃんを見かけると、私はいつも彼のところへ一目散に駆け寄る。

「うん、今日は塾がお休みだから」

彼はたくさんの習い事をしていて、遊ぶ時間がなくてつまらないとよく言っていた。だから、習い事が休みでバロンと思いつき遊べる日は、彼にとって特別な時間だったみたい。公園で会うと、本当に楽しそうだった。

私は公立の小学校に、彼は私立の小学校に通っていたから、私たちが会えるのは、その公園でだけだった。

たまにしか遊べない、優しいお兄ちゃん。

兄弟がいらない私にとってお兄ちゃんは憧れの存在で、顔を合わせると、彼にべったりくっついて遊んでもらった。

「ちーちゃん、たまには僕の家に来て遊ばない？」

いつもは公園でバイバイするのだけど、その日、彼は私を家に招待してくれた。私はその誘いを素直に喜んだ。だって、これがお兄ちゃんと会える最後の日だなんて、思いもしなかったから――

「行きたい！ 行つていいの？」

「うん、すぐ近くなんだ。おいでよ」

こうして、私はたった一度だけ、お兄ちゃんの住むお屋敷に入れてもらった。

そう……彼の家は、まさに「お屋敷」。普通の家とはかけ離れた、立派な洋館だったのだ。彼の家で見るものすべてに、私は驚いた。

「ちーちゃん、早くおいで」

手招きされて、私はお兄ちゃんの後ろを慌てて追いかけた。キョロキョロとせわしなく周囲を見まわしながら。

芝生が綺麗に手入れされた庭は広く、色鮮やかな季節の花が咲き乱れている。

洋館の大きな扉を開けると、そこは大理石がピカピカ光るエントランス。もちろん、その頃の私は大理石やエントランスなんて言葉は知らなかったけれど……ただただ、その立派な建物に圧倒されてしまった。

驚くことは山ほどあったけど、中でも一番ビックリしたのは「おやつ」だった。

繊細で可愛らしいティーカップに、丁寧に注がれる紅茶。その美しいオレンジ色に私はうっとりする。

上品な花柄のプレートには小さなスコーンが何個か載っていて、甘いジャムが数種類用意されていた。

あれはいわゆる「アフタヌーンティー」というやつで……あの時、私はお姫様になったような気分だった。

「遠慮なく食べていいからね」

お兄ちゃんは私にお皿を渡して、ニココリと微笑んだ。まるで絵本の中から飛び出してきた王子様のような笑顔に、幼いながらも照れてしまったのを覚えている。

「紫苑が友達を連れてくるなんて、めずらしいね」

私がスコーンを頬張っている時に部屋に入ってきたのは、お兄ちゃんによく似た男の子。車椅子に乗っていて体調が悪そうだったけど、目はキラキラしていた。

「僕は薫。よろしくね」

「かおる……さん？」

私が首をかしげると、お兄ちゃんは微笑んだ。

「僕の兄さんなんだ。風にあたりすぎるのは良くないから、外出は禁止されてるんだけど……今日はちーちゃんが遊びにきてくれて、僕も薫兄さんも楽しいよ」

お兄ちゃんがそう言ってくれたことが嬉しくて、私は何度もうなずいた。

薫さんに会えたのは、この日だけだった。でも、お兄ちゃんが彼をとっても信頼しているという事はわかった。

「紫苑が女の子と仲良くしてるなんて知らなかったな。将来のお嫁さん候補かな？」

薫さんはからかうように、私とお兄ちゃんを交互に見ながら笑った。

お兄ちゃんは顔を赤くして、しどろもどろになっている。その姿を見て、私は思わ

ず……

「私、お兄ちゃんのお嫁さんになりたい！」

こんな大それた発言をしてしまった。

優しくてなんでも知っているヒーローみたいなお兄ちゃんに、私は恋をしていたのだ。お兄ちゃんはまだ小学六年生だというのに大人びていて、礼儀作法もきちんと身についた貴公子で……彼のまわりには、いつもキラキラと輝くオーラが漂っていた。

子ども時代とはいえ、私の恋心は、大人と変わらないくらい真剣なものだった。

お兄ちゃんを見るとドキドキする。

もっとお兄ちゃんと一緒にいたい。

いつもそう思っていた。

「ちーちゃんがお嫁さんになってくれたら、僕も嬉しいな」

お兄ちゃんは照れながらも、そう言ってくれた。

子供同士の約束。

大人から見たら、微笑ましいただの口約束だろう。でもこの時、私の中で彼は、将来を約束した人々になった。

「本当？ 本当に私をお嫁さんにしてくれる？」

「うん。大人になったらね……きっと」

こうして、私の密かな初恋は可愛らしく実った。

お兄ちゃんと公園で遊ぶ時間。それは当時の私にとって、一番幸せな時間だったように思う。

でも、大人と子供の世界はまるで違う要素で成り立っているようだった。その、大人の事情とやらで、母は私が彼と遊ぶことを猛反対した。

「お兄ちゃんのお屋敷はねえ、立派な門があつて。お部屋もとっても綺麗で。それで、おやつがすごい！」

嬉しくてテンションの上がっていた私は、お兄ちゃんのお屋敷での出来事を母に克明に話した。すると、母は私の想像とはまったく違う反応を見せた。

「お兄ちゃんつて……もしかして山口さんのお宅のお坊ちゃん？」

「山口……そういうえば、玄関にそう書いてあつたかも」

私が答えたとなん、母の顔はサーツと青ざめ、すごい剣幕で怒った。

「山口さんのお宅に上がるなんて、とんでもない！ いい？ もう二度と行っちゃダメよ。別のお友達と遊びなさい」

その日、私は怒られたショックで、夕飯も食べずに泣いた。

母がなぜそんなことを言うのか、当時はわからなかった。私の家とは比べものになら

ないほど、お兄ちゃんの家の格式が高いということを知ったのは、もう少し後になってからだ。

母には怒られたものの、私はどうしてもお兄ちゃんと遊びたくて、お友達の家に行く
と嘘をついては、頻繁に公園に足を運んだ。

でも、お兄ちゃんが私の前に姿を現すことはなかった。

なんだか不安になって、お屋敷にも足を運んだけれど、バロンの元気な声も聞こえず、
周囲はいつもシンと静まり返っていた。

ある日、山口さん一家はあの屋敷から引越したのだと知った。それは、もう二度と
会えないということだ。私はまだ、さようならも言っていないのに……

生まれてはじめてのアフタヌーンティー……

黄金のように輝く紅茶。焼きたてのスコーンに、たっぷりのマーマレード。

本当に……夢でも見ているみたいに美味しかった。

何かと忘れっぽい私だけど、あの日のことは今でも覚えている。あのアフタヌン
ティーとお兄ちゃん存在は、私にとって本当に特別なものだったのだ。

1 運命の再会

私——宮原千紗都は、とある商社に勤めている。会社の規模はそれなりに大きく、
商社なだけあって様々な部署がある。私が所属しているのは、海外エネルギープロジェ
クトに関わる部署だ。上司は海外を忙しく飛びまわっているけれど、パソコンオペレー
ターをやっている私は机の前に張りついていることが多い。

内勤とはいえ業務量がすごく多くて、きついなあと思うこともしばしば。しかも、直
属の上司がなかなか厳しい。私は自分の能力が追いつかないことが悔しくて、効率アッ
プの方法を日々、模索している。

「千紗都が甘い顔するから、無茶な仕事ふられるのよ！」

昼休み。仲のいい同期のメグこと木崎恵美は、プリプリと怒りながら言った。

彼女は秘書をしていて、その働きっぷりは私の比ではない。多忙な社長のスケジュー
ル調整に、海外からのお客様への対応まで完璧にこなす。彼女は私の憧れの存在だ。

「嫌々やってる仕事じゃないし、大丈夫。原井さんも意地悪で言ってるわけじゃないか
ら……頑張るよ」

原井さんはアラフォーの敏腕社員で、この会社ではまだ数人しかいない女性課長。私の直属の上司である。仕事には厳しい人だけど、彼女の部下はみんなキャリアアップしている。それにこのご時世、楽な仕事なんてあるはずがない。

（はあ……とはいえ、いくら働いても、なかなか仕事が終わらないんだよね）

仕事はキツイものの、お給料はそれなりにもらっている。先日、両親から店が危ないと言われて、五十万ほど援助することもできた。小さな電器店だけど、自分が育った実家だ。ピンチの時には、少しでも手助けしたい。

「千紗都很好いじゃないけどさあ……あー、早く十二月にならないかなあ。ボーナスとクリスマス、超楽しみ！」

「クリスマス……」

今日は十一月十日。クリスマスにはまだまだ早い気がするけれど、街や人は徐々にぎわいはじめている。

「今年はどんなクリスマスデート、しようかなあ」

メグは楽しそうにつぶやいた。

彼女の恋人は、隣のビルで働くイケメンサラリーマン。お互い忙しうだけど、デートする時間もちゃんと作っている。仕事と恋を両立させているメグは、やっぱりカッコいい。

私はといえば、今年二十六歳になったけど、恋人と呼べる人はいない。

「千紗都是クリスマス、どうするの？」

「私は……うーん、一人でのんびり過ごすよー」

私が答えると、メグは「ご隠居か、キミは」と言って笑った。

「千紗都のこと狙ってる男も、結構いるんだからねー？ その気になれば、恋人だってすぐできるんだから。もっと積極的に！」

メグに背中をバンバン叩かれてしまったけれど、私の気持ちは変わらない。

今のところ、恋人としてお付き合いしたいと思える男性がいないのだから仕方ない。

私の理想は、幼い頃に結婚の約束をしたあの〃お兄ちゃん〃なのだ。これは誰にも言うたことがない。

（あんな王子様みたいな人が、今の私の前に現れるはずないんだけどさ）

小学生の頃、男の子はあまり話さない私をからかって楽しんでいるようだった。中学生になると、それがさらにエスカレートして、私はますます異性と話せなくなった。すっかり男の子が苦手になった私は女子高、女子大と進み、男性とは縁遠い人生を送っている。社会人になり、先輩社員から告白されたことはある。ただ、理想のお兄ちゃんとは違う気がして、お付き合いには至らなかった。

（このままだと、私は一生恋愛がでずに終わってしまうのかもしれないな）

だけど、それでもいいのだ。自分に嘘をついてまで、恋をしたいとは思わない。

「あ、私そろそろ行くね。何かあったら、いつでも相談してよ？」

昼休み終了十五分前に、メグは社食の席を立った。

定食を半分しか食べていなかった私は、慌てて残りを食べた。

（クリスマスかあ……）

十三時のチャイムが鳴り、私は仕事に戻った。

デスクには、山のような資料が積み上げられている。

『追加でデータ入力をお願いします。原井』

午前にはなかった資料に、そんなフセンが貼られていた。

業務に必要なデータは、だいたい私のところに流れてくる。私はそれをエクセルなどに入力してグラフや表にしたり、資料として使えるようにまとめ直す仕事をしている。

「今日中に終わるかな……」

一瞬不安になったけど、弱音を吐いている場合ではない。今はとにかく、データ入力に全力を注ぐしかない。だけど、そんな時に限って別の仕事がまいこんでくる。

「宮原さん、会議室にお茶を五人分、お願いできる？」

係長はそう言って、私の返事を聞く前に会議室へ消えた。

手早く緑茶を用意して会議室に運ぶと、お客様の一人が「ごめん、ブラックコーヒーくれる？」と言い出した。仕方なく、今度はコーヒーを淹れる。

ようやく机に戻ると、原井さんが重そうなファイルを持って立っていた。

「あ、宮原さん、これも追加で頼めるかしら？」

私は頬が引きつりそうになるのをなんとかこらえた。

「が、頑張ります！」

私がそう言うと、原井さんは満足そうにうなずいた。

彼女からふられる仕事の多さに、心が折れてしまいそうだ……

（いやいや、弱音を吐いてる暇があったら、仕事終わらせちゃおう！）

私は資料に手を伸ばし、仕事を再開した。

あと少し……あと少しでポーンが入る。

そうしたら、ずっと欲しかったウェッジウッドのボーンチャイナコレクションを増やすのだ。

自分にそう言い聞かせながら黙々とデータを入力していく。

しばらくの間、ひたすらキーボードを叩き続けていたのだけど、ふいに周囲がざわめいている気配を感じた。

「ん？」

顔を上げると、私のすぐ傍に、優しそうな笑みを浮かべた素敵な男性が立っていた。座っているから余計に大きく見えるのかもしれないけど、すごく背の高い男性だ。

私は馬鹿みたいにポカンと口を開けて、彼を見上げた。

「ご苦勞様。大量の書類に囲まれて、大変そうですね」

「あ……えっと」

何をどう答えたらいいいのかわからなくて、私は固まってしまう。

誰だろうと思っていると、彼はそのまま部長の席の前に進み出て、私たちの方に向かって優雅に一礼した。

「長期海外赴任された部長の代理でまいりました、山口です。みなさん、どうぞよろしくお願いします」

その堂々とした挨拶に、フロアにいた人たちが一斉に息を呑んだのがわかった。

（この人が……部長代理）

部長が海外赴任することは知っていたけど、代わりの人が誰なのかは聞いていなかった。まさかこんな素敵な人が上司になるなんて……

山口さんは、社内でもちよつとした有名人で、私も名前だけは知っている。彼は、この会社の会長である山口隆三氏のお孫さんなのだ。社長は当然、山口さんのお父様。でも、あまりにも隆三氏の存在感がありすぎて、社長はちよつと影が薄いと社員たちは話

している。

山口さんは、ずっとフランス支社で仕事をしていたはずだ。

彼の容姿端麗ぶりは、ここ本社でも噂になっていて、フランス支社とのテレビ会議があるとわかると、多くの女性社員が会議室にお茶を運びたがっていた。

まさか彼が部長の代理で、この部署にやってくるとは……

山口さんは、社員一人ひとりに丁寧に挨拶している。彼の持つ「高貴」で「理知的」な雰囲気は、憧れの「お兄ちゃん」にどこか似ていた。私は思わずポーツと見とれてしまった。

「山口さん、あなたが上司でとても嬉しいわ」

原井さんが親しげに山口さんに近寄っていった。

「原井さん、この前のプロジェクトではお世話になりました。こちらこそ、これから一緒に仕事ができる光榮ですよ」

山口さんも笑顔で返す。

原井さんは、海外エネルギーに関わるたくさんさんのプロジェクトに携わっている。山口さんとも、仕事をしたことがあるようだ。

対等に話をしている二人を見て、その存在に圧倒されてしまった。

（なんだか雲の上の人を見ているみたい）

自分から自己紹介する勇気がなくて、私はそのまま黙って作業を続けることにした。すると、しばらくして山口さんの方から声をかけてきてくれた。

「忙しいところごめん。まだ君の名前、聞いてなかったよね？」

「え……と。名前ですか？」

「うん」

ただ名前を言うだけなのに、妙に緊張してしまう。

「みや……宮原千紗都と言います。入社五年目で、主にデータや資料の入力・管理をしています」

「そう。五年働いているなら、社内のことも詳しいでしょう。もしよければ、簡単に案内をしてもらえないかな」

「え？」

私は思わず原井さんを見た。データ入力は、まだまだ終わりそうにない。

原井さんは少し考え込んでから言った。

「そのデータ入力は後まわしでいいわ。山口さんを案内してあげて」

「あ、はい」

私は慌てて席を立つ。

思いがけない大役を引き受けることになり、どうにも焦ってしまう。
私は原井さんにべこりと頭を下げて、山口さんと一緒に部署を出た。

「ええと、こちらが総務課です。その向こうにいくつかあるのが小会議室になります」
ギクシャクと社内を説明して歩く私の後ろを、山口さんはフンフンと興味深げにうなずきながらついてくる。

（私なんかの説明で、わかってくれるのかなあ）

そこが不安だった。社内を案内するなら、もっとふさわしい人がいるはずなのに……
どうして山口さんは、私を指名したんだろう。

不思議に思っていると、彼は不意に立ち止まり、優しい目で私を見た。

「ど、どうしました？」

私も立ち止まって彼を見上げる。

「覚えてないのかな、宮原さん。ちーちゃん……って昔は呼んでた」

「え？」

会社の御曹司おせうしとのつながりなんて、私にあるはずがない。

山口さんは、生まれてからずっと一流の教育を受けてきた人だと聞いている。

そんな人が、どうして私のことを知っているのだろう。

「小学六年生まで、君の家の近所に住んでいたんだ。覚えてない？ 飼っていた犬の名前は、バロンっていうんだけど」

「バロン……」

その名前には覚えがある。

垂れた耳が愛くるしいビーグル犬が、すぐ脳裏に浮かんだ。そして、その犬の散歩をしていた優しいお兄ちゃんの姿も……

そこまで思い出したところで、私は心臓が止まりそうなくらいビククリした。

「え、もしかして……あの、お兄ちゃん!?」

「思い出してくれた？」

啞然^{あぜん}としている私を眺めながら、彼は笑みを深くした。

私が紅茶好きになるきっかけをくれたお兄ちゃん。

夢のようなアフタヌーンティーを体験させてくれた、大好きなお兄ちゃん。

私の……初恋の人。

「まさか一緒に仕事をする事になるとはね」

照れたような表情でつぶやいた彼は、「少し休憩しようか」と言い、空いていた会議室に入っていく。

「あ、では、お茶……用意しますね」

給湯室に向かおうとすると、彼は私の手首をグツと掴^{つか}んで自分の方へ引き寄せた。そしてそのまま、会議室の扉を静かに閉める。

「待って。お茶なんていいよ」

「で、でも」

「運命の再会……もっと喜んでくれると思ったんだけどな」

そう言って、彼はちよつと寂^{さび}しそうな表情を浮かべる。

「う、嬉しいですよ。もちろん！」

（ただ、突然すぎて心がついていけないんです！）

私が内心パニックになっているのに気づかないのか、山口さんは手を掴んだまま離さない。

彼のぬくもりが伝わってきて、自然と鼓動が速くなっていく。

「まあ……これから毎日顔が見られるんだし、焦らなくていいよね」

余裕の笑みを浮かべたあと、彼はようやく私の手を離してくれた。

それでも私の胸はドキドキと高鳴り、手のひらには汗までにじんでくる。

「忙しいところ、ごめんね。また……時間を作って昔話でもしたいね」

彼は会議室の扉を開けて廊下に出ると、ドアを押さえて私のことを待っていてくれた。

（ジェントルマン……こんな仕事を普通にしてくれる男性に、はじめて会った！）

恐れ多いような気もしたけど、こうやってレディーとして扱われるのは決して悪くない……というより、夢心地だ。

「じゃ、案内ありがとう」

そう言い残して、彼は颯爽と廊下を歩いていった。

(もしかして、彼には案内なんて必要なかったんじゃないか……?)

残された私は、漠然とそんなふうに感じた。

——もう二度と会えないだろうと思っていた。お兄ちゃん。彼との再会は、私の心を感動でいっぱいにした。

山口さんが赴任してきてから、私は会社に行くのが少し楽になった。

もちろん仕事の忙しさは変わらないけれど……彼がいるだけで嬉しいというか、癒されるような気がする。

原井さんと山口さんは仲が良いようで、よくコーヒーを片手に二人でディスカッションしている。そのまま仕事の打ち合わせになることも、しばしば。

いつも穏やかな笑みを浮かべている山口さんだけど、仕事の時にはすごく真剣な顔をする。

その凛々しい姿を見て、彼への憧れがいつそう強くなった。

(……彼は、この会社を背負って立つ人だものね)

のらりくらり遊んで暮らせる立場の人ではない。

将来会社を任せられるとなると、とんでもない責務が彼の肩にのしかかる。私には想像もできない世界だ。

山口さんは英語とフランス語が堪能で、取り引きのある海外エネルギー事業の会社とも軽々と交渉している。社内だけでは務まらない仕事も多いようで、今後は様々な国へ行つて現地を視察しなければならぬらしい。それだけでもすごいのに、彼は将来のリーダーになるべく、今よりさらに多くのことを経験する必要がある。

(考えただけで眩暈がしそう……)

小さい頃はわからなかったけれど、山口さんと私の間には、やはりとても大きな壁があるのだ。彼のいる世界に私が足を踏み入れるのは容易なことではないと、思い知らされる。

でも……どんな形であれ、お兄ちゃん、と再会できたのは素直に嬉しい。何より、二十年近く会っていなかったのに、山口さんの方から私を思い出してくれるなんて。

「あんなおチビちゃんだったのに、すっかり大人の女性になったんだね」

廊下ですれ違った時にそんなことを真顔で言われて、顔から火が出そうなくらい恥ずかしかった。

山口さんこそ、ずいぶん変わった。
仕立てのいい高級なスーツを着て、素敵な大人の男性になって……声をかけられただけで体が震えてしまいそうな、高貴な雰囲気も備えている。
でも、笑顔はあの頃のままだった。「ちーちゃん」と笑顔で呼んでくれた彼に、私はとてもホッとした。

再会して以来、山口さんを見かけると、ドキドキしてしまう。
私の日常は、ささやかではあるけれど、幸せで充実した日々に変化した。

そんなある日。いつも昼食と一緒に食べる同期のメグは、本日お休み。
有給を取って彼とテーマパークに行っているはずだ。

「仲良しで、うらやましい限りです……」

そんなひとり言をつぶやきながら、私は一人で食堂の席についていた。
他にも仲の良い同僚はいるけど、今日はグループに入ってワイワイとおしゃべりをする気分にはなれなかった。

仕事の量は相変わらず多く、原井さんからは次々とデータ入力の手配が飛んでくる。
午前中の間に終わらせる予定の仕事が、まだ半分以上も残っていた。
今日も残業だろうか……

「……さん。宮原さん！」

ぼんやりしながらトンカツ定食を食べていたら、いつの間にか向かい側の席に山口さんが座っていた。私は驚きのあまり飛び上がってしまいそうになる。

「山口さん!？」

手にしていた箸^{はし}から、トンカツの切れ端が落ちた。

私のまわりにいた他の社員たちは、めずらしいものでも見るみたいに、チラチラとこちらの様子をうかがっている。

山口さんは、その場にいるだけで目立つ。

だけど彼は、自分がどれぐらい注目されているのか、あまりわかっていないみたいだ。
「どうしたの、ボーッとして。顔が赤いけど……風邪？ 熱とかあるの？」

「いえっ！ 風邪は引いてません」

私は皿に落としたトンカツを拾い上げて口に入れようとしたけど、どうしても箸が進まなくて、再び皿に戻してしまった。

顔が熱い……。ある意味、今の私は熱があるのと同じ状態だ。でもそれは風邪のせいではなくて、山口さんが目の前にいるから。

「仕事中に話しかけるわけにいかないし、昼食ぐらいは一緒にと思ってただけだ。宮原さん、いつも誰かと一緒だから、なかなか声をかけられなかったんだ」

そんなふうに言ってもらえるのは嬉しい。でも、こうやって向かい合って食事をするなんて、今の私には無理だ。

（だって……王子様を目の前にして、トンカツ定食、食べられますか？ 無理でしょう!）

「昔の思い出とか、いろいろ話したいことがあるんだ。だけど、もしかして僕のことなんか、すっかり忘れちゃったのかな」

寂しそうな表情を浮かべて、私をうかがう山口さん。

（忘れるわけじゃないじゃないですか！ 私はずっとあなたを理想としてきたんですよ）

……なんて言えるはずもなく、私は「いえ、そんなことはありません」とだけ答えた。

時刻は十二時三十分。

遅めに来た山口さんは目当ての定食をゲットできなかったのか、パンを二つと牛乳を手をしている。

私はなんだかお腹一杯になってしまって、半分も余ったトンカツ定食を申し訳ない気持ちで見下ろした。

「バロンを放して遊んだ公園って、まだあるの？」

山口さんはずつとその話をしたかったみたい。

彼の言葉をきっかけに、私の中でセピアになっていた思い出が、フルカラーになって

よみがえる。

「あ、はい。もう遊具も錆^{さび}ついて、すっかり古い公園って感じですけど」

「そうかー……またあの周辺、歩いてみたいなあ」

それを聞いて、私の期待がふくらむ。

あの公園は、私の実家の近所だ。いつでも案内することができる。

（い、いや。さすがに図々しいかな。とりあえず、水でも飲んで落ち着こう）

軽く震える手で、コップを持ち上げる。

「千紗都ちゃん」

突然そう呼ばれて、私はむせてしまいそうになった。

「……二人きりの時は、名前と呼んでいいかな。さすがに大人になって、ちーちゃんはないだろうから」

「は……」

「はい」と答えようとしたのに、うまく言葉が出てこない。そんな私を見て、山口さんは寂しそうな顔をした。

「なんだか僕ばかり、昔のことを懐かしがってるね。もしかして迷惑だった？」

「めめめ……迷惑なんて。あるわけなんです！」

（単に緊張して、言葉が出ないだけなんです!!）

今の山口さんは、それくらい雲の上の人っていう感じ……さつきから、コロッケパンを食べる姿さえ素敵で、見とれてしまいそうなんです。

だけど、そんな私の心の叫びが聞こえるはずもない。山口さんは私を見つめながら、考え込むようにして言った。

「会社だと、なかなかこうやって話すチャンスがないから。もし良ければ、オフの日にもゆっくり昔話をしたいなって思ってるんだけど……」

「っ!!」

休みの日に、彼と会えるなんて。

私は思わず山口さんの顔をジッと見つめてしまった。

ドキドキしてうまく話せない私を見て、彼はまだパンを食べ切っていないのに席を立つ。

「ごめんね、僕がいると千紗都ちゃんの食が進まないみたいだから」

「あ……」

引きとめることができないまま、彼は立ち去ってしまった。

「う……」

私は冷え切ったトンカツ定食を前にして、ガックリと肩を落とす。

(せっかく山口さんが誘ってくれたのに、ちゃんと答えられなかった……)

しょんぼりしながら食堂を後にし、席に戻ってパソコンを立ち上げると、新着メッセージが届いていた。

『山口さんを歓迎する会のお知らせ』。もちろんこれは参加だ。私は参加する旨を書いたメールを幹事の伊藤さんに送った。山口さんとは、なかなかスマーに会話することができない。だけど、お酒が入れば少しは違うかもしれない。

そんな期待を抱いて、仕事に戻った山口さんの方をこっそりと見る。

(あ、また原井さんと難しそうな話してる)

山口さんにとって、原井さんは頼りになる存在らしい。二人はしょっちゅう顔と顔を突き合わせて、書類に目を通してしている。そんな姿を見てみると、自分ももっと仕事ができるようにならなくちゃという気持ちになる。

多少の英語はできるものの、今の私はまだまだ半人前だ。

(とりあえず自分ができるところから頑張るしかないか)

ため息をつきながら仕事を再開しようとした瞬間、今日が自分のお茶当番の日だったことを思い出した。

(美味しい紅茶を淹れたら、山口さん喜んでくれるかな?)

うちの部署では、フロア内の女子社員で当番の日を決めて、三時の休憩時間にお茶を出すことになっている。他の人は緑茶を淹れることが多いけれど、私は自分が楽しみた

いというのもあって紅茶のティーバッグを持ち込んでいる。
少しそわそわしながら仕事を進め、三時すぎに紅茶を淹れた。

「どうぞ」

山口さんの机にカップを置くと、彼は驚いたように顔を上げた。

「あの……紅茶です。よろしければ」

すると、彼はカップに手を伸ばして微笑んでくれた。

「ありがとう。美味しそうだね、いただくよ」

その笑顔が見られただけで、私は大満足だった。

原井さんにも紅茶のカップを出し、そそくさと席に戻って仕事の続きに取りかかった。
仕事は相変わらず忙しいけれど、山口さんの声を聞いて笑顔を見られる日々は楽しい。
彼がいてくれるだけで、明日も頑張ろうと思える。

(バロンと遊んだ公園。いつか一緒に歩ける日が来たらいいな)

そんな淡い期待を抱きつつ、この日は大量のデータ打ち込み作業に追われて終わった。

翌日の昼休み。

テマパークのお土産を差し出しながら、メグは興味津々といった感じで私の顔をのぞき込んだ。

「それって山口さんなりのアプローチなんじゃない？」

「ア、アプローチ？」

「うんうん。千紗都の思い出の人なんでしょう？ 迷うことないじゃない。千紗都から誘っちゃえー！」

山口さんがやってきた日、メグには彼が昔好きだったお兄ちゃんのだと打ち明けた。それ以来、彼女はこうして私をけしかけてくる。

「でも、山口さんすごく忙しそうだし」

「まあねー。私、休憩室で一回彼を見たんだけど……あの人、煙草吸うんだね」

「え、そうなの？」

山口さんが煙草を吸うなんて、全然イメージじゃない。私はかなり驚いた。

でも……あの人の立場や周囲からの重圧を考えると、それぐらいの逃げ道がないとやっていられないのかもしれない。

「うん。哀愁が背中に漂っててさ。相当苦労してるんだろうなって思ったよ。でも、あの影のある感じがまた男つぷりを上げてるんだろうね」

「……そうだね」

メグも山口さんの忙しさや大変さを気にかけているようで、だからこそ私とのデートで息抜きをさせてあげたらどうかとアドバイスしてくれた。

（私から誘えたら、確かにいいんだけど。でも、きっかけが掴めない）
 こんな私に、驚くべきアクシデントが起きたのは次の日である。

その日は朝から雲行きが怪しくて、今にも雨が降ってきそうだった。なのに、うつかり寝坊して慌てていた私は、傘を持たずに、一人暮らしをしているアパートを飛び出してしまった。

すると、空から大粒の雨が降ってきた。

十一月の雨は、一粒一粒が身を凍らせるほど冷たい。

「寒いー！」

まだ会社まで数百メートルあるという場所で、私はシャッターの降りている商店の軒先に駆け込んだ。

雨雲は空全体にたちこめていて、すぐにやんでくれそうにない。

「あと少いで会社に着くの……」

恨めしい気持ちで空を睨んでいると、大きな黒い傘を差した男性が私の前で立ち止まった。

「あ……山口さん」

それはページジュのトレンチコートを着た山口さんだった。

雨の中で見てもいい男……思わず彼に見とれてしまう。

「千紗都ちゃん、傘持っていないの？」

彼に名前で呼ばれると、ドキッと胸が高鳴る。

「はい……急いで家を出てきてしまったので……」

恥ずかしくてうつむくと、彼はそっと黒い傘をたたんだ。

「隣……いいかな？」

「あ、はい」

この商店の軒先は、やっと人が二人入れるくらいのスペースしかない。私たちは身を寄せ合うように雨宿りした。

何か話があるのかと思っただけ、山口さんは黙り込んでいる。だけどその沈黙は決して重いものではなかった。まるで二人の時間が止まってしまったみたい。

無言で雨を見つめながら、私たちはしばらくそこに立ち尽くしていた。

「雨に……感謝だな」

「え？」

山口さんの言葉に、私は思わず彼を見上げる。

「ずっとこうしていたんだけど、朝イチで会議があるから、そろそろ行かないと。千紗都ちゃん、僕の傘を使っていよいよ」

彼はそう言って、私の手に傘を持たせた。

「え、いいですよ！ 山口さんが濡れてしまいます」

「いや、千紗都ちゃんに風邪引かれたら困るからね」

山口さんは身をすくめて、雨の中に一步踏み出す。すると、彼の両肩がすぐに濡れてしまった。

「僕と相合傘してるのを誰かに見られたら、千紗都ちゃんも困るでしょ」

「そ……それは、その……」

私が戸惑っていると、山口さんは思いついたようにトレンチコートの合わせに手を差し入れ、ジャケットの胸ポケットから一枚の名刺を取り出した。

「これ、渡そうと思ってたんだ」

「え？」

差し出された名刺を受け取ると、裏面に山口さんのプライベートのメールアドレスと携帯番号が書かれていた。

（山口さん!?）

思ってもみなかった山口さんからのアプローチに、心拍数は一気に上がる。

「夜なら、いつでも連絡してくれていいからね」

「あ……」

私为名刺から顔を上げると、彼はすでに会社に向かって駆け出していた。遠ざかって

いく彼の広い背中を、私は呆然と見つめる。

ドキドキして、なかなかその場を動くことができない。

（これって、メールしたり電話したりしてもいいっていうことだよな?）

山口さんとの距離が一気に縮み、私の中で彼の存在がまた大きくなる。

憧れの〃お兄ちゃん〃は今、リアルな男性として私の心を揺さぶっていた。

（あの小さかった頃のまま、私……まだ彼に恋をしているのかな）

「はあ……ドキドキしすぎて胸が苦しい」

深呼吸して息を整え、渡された名刺をそっと財布にしまう。そして借りた傘を広げながら軒先を出た瞬間、頬に雨粒があたる。

「ひゃっ、冷た！」

思わず小さく叫んでしまった。

（山口さん……風邪引かないといいけど）

その時、私は彼に傘のお礼を言い忘れてしまったことに気づいた。こんな冷たい雨の中、私を気遣ってくれたのに……会社で顔を合わせたら、すぐにお礼を言おうと心に決めた。

2 惹かれる思い

山口さんから傘を借りた日、彼はずっと小さく咳をしていた。冷たい雨にうたれて、体調をくずしてしまったんだろうか。

（申し訳ないことしちゃったな……）

借りた傘は社員用の傘立てに置き、部署で朝の挨拶を交わした時にお礼を言った。「帰る時にまだ降ってたら、気にしないで使っていいからね」

そう微笑んでくれたけど、まさか帰りも山口さんをびしょ濡れにさせるわけにはいかない。私は昼休みの間にコンビ二でビニール傘を買い、その日は濡れることなくアパートに帰ることができた。

一番落ち着く自分の部屋にたどり着くと、やかんにお湯を沸かして、大好きなアッサムティーを淹れる準備をする。この季節はミルクティーにするのが美味しい。濃いめに出したアッサムをお気に入りのカップに注ぎ、ミルクを落とす。

一口飲んで、ホウツと一息ついた。

（山口さん……大丈夫かな）

私は財布から彼の連絡先が記された名刺を取り出して、じっと見つめる。電話をかけるなんて絶対無理だけど、メールで体調を聞くくらいなら大丈夫だよ……

男性にメールを送るなんて、滅多にないことだ。私は仕事を終えて帰宅する道すがら、ずっと彼へのメールの内容を考えていた。

『山口さん 体調はいかがですか？ 今日寒い中、傘を貸していただいてありがとうございます。風邪など引かれてないといいのですが。 宮原千紗都』

長々と考えていた割に、文章にしたら案外短いものになった。最後は『宮原』とするか『千紗都』とするか悩んだけれど、結局フルネームを入力する。

時刻は夜の十時。彼のことだから、まだ会社に残って仕事をしている可能性もある。ただあまり遅い時間にメールをするのも迷惑だろうと思って、私は勢いに任せてメールを送信した。

すると、思ったよりも早く返信がきた。

『千紗都ちゃん 心配してくれてありがとう。君のメールで咳が止まったよ。それより、明後日の土曜日は空いてるかな？ 良ければ少し時間をもらいたんだけど。 紫苑』
メールの内容に、私の心臓は破裂寸前。

「これって……デートなのかな？」

期待に胸がふくらむ。

私はすぐにオーケーの返信をした。すると、ほどなくして再び彼からメールが届く。『ありがとう。じゃあ、思い出のつまったあの公園で、午後一時に』

思い出の公園……彼がそう言ってくれたことが嬉しい。それに、あの公園だけで通じてしまう関係にも、ドキドキしてしまう。

私は舞い上がりながらも、ひかえめに『当日、待ってます』というメッセージを送信して、そのまま携帯を握りしめた。

思いがけず、山口さんと二人きりの時間が実現しそうだ。

会社では上司と部下という関係にある私たちが、幼い頃の思い出を共有する仲だなんて……誰も想像できないに違いない。

自分でもメールの内容が本当のことなのか信じられなくて、ベッドの上で心を落ち着けるためにうずくまっていた。

（初恋のお兄ちゃんと……またあの公園で会える）

彼はあの頃からとても優しく、私はいつもドキドキしていた。そんな彼は、当時の面影をそのまま残して私の前に現れた。

運命……。まさに、これは運命ではないだろうかと期待が高まってしまった。

山口さんはただ昔が懐かしくて、私と話したがついていられかもしれない。だけど、そこにはほんの少しでもいいから恋愛的要素がないか、探ってしまう。

（ああ、つい先日まで恋愛の「れ」の字の気配もなかった私とは思えない）

火照る頬を押さえながら、小さな頃と同じように、自分は今も山口さんに恋をしているんじゃないかと胸が高鳴る。

この日は眠りに落ちるまで、山口さんからもらったメールを読み返し、明後日にはプライベートの彼と会えるのだということを何度も確認した。

山口さんとの約束の日。

普段はお洒落をする用事もないせいで、最近のワードローブが適当になっていたことを猛烈に後悔した。それでも、去年買ったお気に入りのポレロが映えるコーディネートで、約束の場所へ向かう。

約束の午後一時少し前に到着したけれど、彼はもっと早く来ていたようだ。公園の様子を懐かしそうに眺めながら、ゆっくり歩いている姿が見えた。

「山口さん！」

思い切って声をかけると彼は私に気づき、嬉しそうに微笑みながら片手を上げた。

「来てくれてありがとう」

「待ちました？」

「ん……なんだか朝から落ち着かなくてね」

山口さんの笑顔が幼い頃の彼と重なって、ドキッとする。

「千紗都ちゃん、私服姿も可愛いね」

サラリとこういうことが言えるなんて、すごい。

彼は黒いパンツにチェックのシャツを着て、ピーコートを羽織^はっている。

その姿はまるで雑誌のモデルみたいだった。大人の男性でピーコートをこれだけ素敵に着こなせるとは。

だけど私は照れてしまって、彼の私服姿が素敵だと伝えられなかった。

「少し歩こうか」

「はい」

私はロボットのようになぎくしゃくしながら、山口さんの隣を歩く。

（私……山口さんと休日デートをしてるんだ）

ドキドキが止まらない。心臓の音が山口さんにも聞こえるんじゃないかと、心配になっ
てしまうくらいだ。

「すっかり冬だね」

「そうですね」

クリスマスまでは、あと一月^{ひとつき}ちょっと。この時期に男性と肩を並べて歩いていること
に、正直自分が一番驚いている。

（夢じゃないよね）

日が差しているところは暖かいけれど、日陰に入っただけでかなり寒い。コートを羽
織^{えりもと}ついても、襟元から入り込んでくる冷たい風に震えてしまう。

「まだ十一月なのに、今にも雪が降りそうなくらい寒いですね」

冷えきった両手をごしごとこすって、息を吹きかける。

「貸して」

山口さんはいきなり私に手を差し出した。

「え、何をですか？」

「千紗都ちゃんの手」

「あ……」

（山口さんと……手をつなぐってこと？）

「早く、このままだとお互い凍えちゃうでしょ」

「は、はい！」

私は戸惑いながらも、自分の右手を出した。

手をつないで歩くなんて、恋人じゃなければあり得ないことだと思うんだけど。とは
いえ、私はそれを口に出すことができない。

私の右手は、フワリと温かい感触に包まれた。

「山口さんの手、温かい！」

思わず彼を見上げると、クスツと笑われた。

「千紗都ちゃんの手が冷たすぎるんだよ」

「そう……ですかね」

これでは、本当に恋人みたいだ。

私はとっても嬉しいけれど、山口さんはどういう気持ちで手をつなぐと思ったんだろう。

会社では雲の上の存在である山口さんとデートをしているなんて、まだ実感がわいてこない。

風に吹かれて気持ち良さそうに微笑^{ははえ}んでいる彼の横顔を盗み見る。やっぱり素敵。

「懐かしいなあ……そうそう、ここでバロンと遊んだんだよ」

山口さんは足を止めて、つないでいた手をそっと離れた。

そこはまさに、小さい頃に二人で遊んだ思い出の場所だった。

「バロン……可愛かったですよね」

「うん」

山口さんはギーギーと音を立てる古いブランコに腰を下ろすと、嬉しそうに公園の景色を見渡した。

私も隣のブランコに乗って、ユラユラと小さく漕^こぐ。

「これだけ寒いと、子供も遊びにこないね」

山口さんは私の目を見て笑う。

「そうですね。なんだか貸しきりみたい」

「これでバロンがいれば、あの頃と同じなのになあ」

そう言った山口さんの表情は、少し悲しそうだった。

あの頃からずいぶんと時間が経っている。もうバロンは生きていないだろう。それは本当に悲しいことだけど、彼の表情が暗い原因は、他にもあるような気がした。

若いのにとても優秀で、仕事のできる山口さん。だけど彼にとって、今のポジションはまだまだ初期の段階なんだろう。だって、次期社長を期待されているんだもの。そのプレッシャーは、計り知れない。

「お仕事、大変ですか？」

当たり前だと怒られそうなことを、私は口にしてしまった。山口さんはちょっと困ったように、小首をかしげる。

「んー……仕事は嫌いじゃないけど。まあ、それなりに色々……ね」

言葉を濁^{にご}す山口さんを見て、私はやっぱり聞いてはいけないことだったなと反省した。

「変なこと聞いて、ごめんなさい」

「いや、千紗都ちゃんに心配してもらえて嬉しいよ」

私を優しく見つめる山口さんの瞳は、キラキラと輝いている。

「私でなければ……なんでも話してください」

せめて休日くらいは笑顔でいてほしい。

私は、山口さんのお屋敷でご馳走^{ちそう}になったアフタヌーンティーがきっかけで紅茶好きになったこと、学生時代のこと……彼が退屈しないといいなと思いつながら、いろんな話をした。

山口さんは私の話を楽しそうに聞いてくれて、私も自然と笑顔になる。一緒にいる時間は、寒さも忘れさせてくれた。

ふと気がつくとき三時近くになっていて、太陽も少し傾きはじめている。あつという間に時間が経ってしまったことに驚きながら、「もう少しこの夢みたいな時間を過ごしたいな」と思っていた。

すると、山口さんが私に尋ねてきた。

「ねえ、このあたりで美味しい紅茶を飲めるお店はないの？」

コーヒーが飲めるお店は多いけど、紅茶の専門店までは相当歩かなければならない。そう伝ええると、山口さんは「千紗都ちゃんが嫌じゃなければ、そのお店まで歩かない？」と言った。

私の答えは、もちろん決まっている。

彼と一緒にいられるなら、どこまでも歩きたい……

「じゃあ、このまま喫茶店まで歩こうか」

まるで私の気持ちを見抜いたかのように、彼はにっこりと微笑^{ほほえ}んだ。

私はうなずいて、お店のある方向に足を進める。

「千紗都」

名前を呼ばれて振り返ると、山口さんが手をこちらに差し出していた。

（今……千紗都って呼び捨てだった？）

私は驚いて立ちすくんでしまう。彼はおかまいなしに、私の右手をそっと握った。私は何も言えず、ただ彼の温かい手を握り返した。

二人で喫茶店までの道のりをゆつくりと歩く。

街路樹の葉はすっかり落ちて、少し寒そうだ。

道で人とすれ違うたびに、山口さんは私の体をそっと引き寄せた。山口さんの体温がすぐ近くに感じられて、私の心臓はドキドキする。

「結構人通りが多いね、この道」

「そう……ですね」

冷たい風が吹く中、私の頬は妙に熱かった。

二十分ほど歩くと、ようやくティーカップのイラストが描かれた看板が見えた。
「あ、あれですよ。紅茶専門の喫茶店」

私は嬉しくなって、山口さんの手を離して小走りで店に駆け寄った。

「そうか、もう着いちゃったのか」

二十分近くも歩いたというのに、彼は残念そうに言った。

歩いている時、山口さんの手のぬくもりが直接こちらに伝わってきて、私にとっても、この二十分間はとても嬉しい時間だった。

やってきたお店は、カントリー調のデザインで室内が統一されている、ファンシーシヨップのようなたたずまい。山口さんにはちょっと合わないかなと思ったけれど、私の心配をよそに、彼は楽しそうに案内された席に座った。

「僕……勝手にデートを進めちゃってるけど、こんなコースで良かった？」

ここはスコーンも美味^{おい}しいから山口さんにもすすめてみようかな……そんなことを考えていた私は、彼の言葉に驚いた。

（今、デートって言ったよね？）

私はデートしているつもりだったけれど、もしかしたら山口さんは単純に昔を懐かしみたいだけなのかもしれないと、少し不安だった。だから彼の口からデートという言葉

が聞けて、本当に嬉しい。

「私……山口さんと一緒にいられるだけで嬉しいですよ？ 嬉しすぎて、時間が過ぎて

いくのが残念なくらい」

思い切ってそう告げると、山口さんはにっこりと微笑^{ほほえ}んだ。

「そっか……僕も同じ気持ちだよ。良かった」

「はい」

私たちの間に、まるで付き合いはじめのカップルのような、照れたムードが漂^{たな}った。

私は定番のアッサムにミルクを付けて。山口さんはアールグレイをストレートで。

そして、ジャム付きのスコーンを一皿頼む。

「山口さんも紅茶、好きですか？」

「ん……フランスでは、どちらかというとコーヒーを飲むことの方が多かったかな。でも千紗都ちゃんは紅茶派でしょ？」

そう言って山口さんはニコツと笑う。

彼がわざわざこの専門店まで足を運んでくれたのは、紅茶好きの私のためみたい。嬉しいやら申し訳ないやら、いろいろな感情がごちゃまぜになる。

「千紗都ちゃんが好きなものをいろいろ知りたい。君の喜ぶ顔が見たいんだ」

「山口さん……」

そこまで私のことを考えてくれていたなんて、感動してしまう。

「ありがとうございます。紅茶を飲むと心が落ち着くので、私はコーヒーより紅茶を飲んでしまいます」

「そう言われてみると、そうかもしれないね」

そう。今みたいな瞬間。

好きな男の人と向かい合って、紅茶を楽しむ。

そんな時間を過ごすことが私の夢だった。まさか実現する日が来るとは。

山口さんは私の初恋の人。当時の面影を残したまま、想像以上に素敵な紳士になって再会できた運命の人。彼のことを考えると、夜も眠れないほどキドキしてしまう。

(……恋？ やっぱりこれって恋なのかな)

私はこれまで、恋愛と呼べるほどの経験をしたことがない。だから、本当の恋がどういうものなのか、私にはわからない。

もしこれが本物の恋だったとすると、この先、私は彼とどうなりたいんだろう。

山口さんは、私とは別世界で生きている人。

大きな会社の御曹司^{おんそうし}で、部長の留守を預かるくらい仕事のできる人。まさに期待の星だ。いくら私が好きになっても、この恋が成就^{じゅうじゅ}するとは思えない。

(じゃあ、この気持ち……どうすればいいの?)

運ばれてきた紅茶に少しだけミルクを落とし、私は山口さんへの自分の気持ちをぐるぐると考えた。だけど答えがすぐに出るはずもなく、私は紅茶のカップを見つめた。

ミルクティーからは湯気が立ち上っている。今は、目の前の紅茶を味わおう。私はカップにそっと口をつけて、甘いミルクの味を楽しんだ。

ふかふかのスコーンにも手を伸ばす。マーマレードをたっぷり塗ってパクリ。

紅茶の作法では、ジャムをベッタリつけちゃダメって言われてるけど、甘党の私は山のようにジャムを載せてしまう。

幸せな気持ちが心にしみわたって、私はホッと息を吐いた。

「美味しいね」

山口さんが微笑^{ほほえ}んだ。彼が飲んでいるアールグレイも、ベルガモットのいい香りを漂^{ただよ}わせている。

「はい。スコーンも、すごく美味しいですよ」

私が答えると、山口さんが私の顔に手を近づけてきた。そして、ずっと口元をぬぐわれる。

(えっ……?)

「スコーンが付いてるよ」

驚く私に、彼は王子様のように優しい笑顔を見せた。

「す、すみません」

「いや。……千紗都といえるだけで楽しいな。説明しにくいんだけど……こういう気持ちって、なんて言うんだろう」

彼は、色っぽい目で見つめてくる。名前も呼び捨てだし……山口さんは、これでもかというくらい私の心を揺さぶってくる。

「恋……みたいだな」

「え？」

私が目を見開くと、山口さんはちよつと慌てたように言葉を切った。

「いや、ごめん。今日の僕は、ちよつとおかしいな」

もつと先を聞きたかったけれど、それ以上追及することはできなかった。それから私たちは、静かにアフタヌーンティーを楽しんだ。

翌週。

十二月中旬に大がかりなプレゼンがあるということで、その業務に携わっている社員たちは、にわかに忙しくなった。

うちの部署では、かなり前から海外での再生可能エネルギーの導入を促進している。今回のプレゼンが成功すれば、再生可能エネルギーの施設を増設できるのだと聞してい

る。このプレゼンの行方が部署の命運を握っていると言っても、過言ではない。社員たちは、とても真剣に仕事に取り組んでいた。

普段はデータ入力がメインの仕事だけど、今回ばかりは、私もプレゼンの資料作りを手伝っている。修正に次ぐ修正で、てんてこ舞いだ。

「この資料、次の会議で使うの。メモを参考に、修正してくれる？」

「はっ、はい！」

原井さんから、修正指示の入った資料をどんどん渡される。

「本番を意識したりハールサルも、近いうちに行われると思うわ。資料作りはその前に終わらせなくちゃいけないから、引き続きよろしく頼むわね」

「はい、わかりました」

私の手元には、修正しなければならぬ資料、まとめなければならぬ資料が山のようにある。だけど、「間に合わない」なんて言えるわけがない。

（ここは……私も頑張らないといけないところだ）

とはいえ、まだまだ力不足だと痛感してしまう。どうしても修正に時間がかかるし、まわりのスピードに追いつかない。

さっそく資料の修正をはじめると、私の隣に立っている原井さんのもとに山口さんがやってきた。

プレゼンの指揮をとっている山口さんは、原井さんに話しかけることが多い。
「原井さん、この資料なんですが……」

ちらりと横目で二人をうかがう。山口さんが手にしている資料には、外国語がびっしりと並んでいた。私には、それが英語じゃないということしかわからない。フランス語だろうか。

（ひとり言をつぶやく時には、日本語、英語、フランス語のどれを使うんだろう）

三ヶ国の言語を理解できるなんて、山口さんはすごい人なのだと改めて実感した。原井さんは、彼の資料をのぞき込んで言う。

「この間、おっしゃっていた資料ですよね。翻訳して、まとめておきますよ。山口さんは、発表の準備でお忙しいでしょう？」

「すみません、お願いしていいですか」

「ええ、もちろんです」

どうやら原井さんも、三ヶ国以上の言語に通じているようだ。

こんなに近くにいるのに、山口さんを遠くに感じた。先週末、一緒に紅茶を飲んだのは、夢だったのではないかと思えてくる。

だけど、今の私の力では、山口さんの仕事を手伝うことなんてできない。（もっと、もっと頑張らなくちゃ）

私は焦る気持ちで、自分の仕事に戻った。

その日の午後。

頼まれていた会議の資料をコピーしながら、私の心はどうにも落ち着かなかった。

（明日のお昼休み、思いきって彼に声をかけてみようかな）

でも忙しそうにしている山口さんの顔を見ると、それも申し訳ない気がする。やはりプレゼンが終わるのを待った方がいいかもしれない。

「あ、用紙が切れちゃった」

コピー機の画面には、用紙切れのマークが点滅している。コピー用紙などの備品が置かれて一階の倉庫に向かうため、私は部署の片隅にある台車を引っ張り出した。どうせなら、まとめてもらってこよう。

この会社では、節電と健康促進のため、社員のエレベーター利用が禁止されている。役職についている人たちは使っているのに。

ただし、重い荷物を運ぶ時には社員でも利用していいので、私はエレベーターホールに向かう。

到着したエレベーターに乗ると、いつの間にかやってきたのか、山口さんも乗り込んできた。

「あ、お疲れ様です」

「お疲れ様、何か取りに行くの？」

彼は台車をちらりと見てそう尋ねると、一階のボタンを押した。エレベーターの扉が閉まり、下降しはじめる。

思いがけず山口さんと言葉を交わすことになり、私の鼓動はどんどん速くなった。

「資料の準備で、コピー用紙が大量に必要で。なくなるスピードが早いみたいです」

密室に二人きりだということを意識しすぎないように、私はうつむきながら言った。

「そうか、ちよつと紙を無駄にしすぎているかもしれないな……」

「ただ資料をパソコンの画面上で確認するにしても、読みづらいから大変ですよ。印刷するのは仕方ないと思います」

「ん……そうだね。結局、紙ってどうしても使ってしまうよね」

彼と会話をしているだけで、とても嬉しくなる。こんなささいな会話でも、顔が火照ってくるくらいに。

とりとめもない話をしているうちに、無情にもエレベーターはさつさと一階に到着してしまった。

台車の持ち手に手をかけ、私は外に出ようとする。

「……あら？」

なかなかドアが開かない。

ふと山口さんの方を見ると、彼は『閉』ボタンを押していた。

「な、何やつてるんですか？」

「今週は千紗都ちゃんと話すチャンスがなくて、ちよつと寂しいんだ。これって僕だけなのかな？」

気のせいだろうか。山口さんがやけに色っぽいような気がする。

まるでクラゲにでも刺されたように体がしびれて、私は動けなくなった。

「あの、ドア……開けないと。外で、きつと人が待ってますよ」

私はうろたえながら、思わずそんな言葉を口にした。

すると、山口さんの表情はガツカリしたものに變化する。

はぐらかしたと思われただろうか。

私だって、本当はずっと彼と話をしたかったのに、それを伝える手段が見つからない。

私と彼との間にはすごく大きな距離があるような気がして、どうしてもうまく話すことができないのだ。

「……そうだね」

山口さんは小さくつぶやいて、押さえていたボタンから手を離す。

すぐにドアが開いたけれど、一階のエレベーターホールには誰もいなかった。

ほんの数秒のことだったのに、ずいぶん長い間、彼と見つめ合っていたように感じた。その後、山口さんは何も言わずに広報部の方へ歩いていってしまふ。

(山口さんのあの言葉、どう受け取ったらいいのかな？ 私ともう少し接点を持ちたいって思ってくれてるのかな？)

この間と一緒にアフタヌンティーを楽しんだけれど、会社での彼は、雲の上の王子様のような存在だ。あの日、彼はとても嬉しそうに笑ってくれた。でも、私のことをどう思っているのかはわからない。それに私自身、これが本物の恋なのかわからないし……

(山口さんと付き合うなんて……あり得ない話だよ)

そう思った瞬間、私は自分がガッカリしていることに気がついた。彼と付き合えないことを、私は残念だと感じていたのだ。

(つまり私は、彼と付き合いたいと思ってるの？)

熱くなった頬を片手であおぎながら、私は倉庫に向かった。いつもより重く感じるコピー用紙を、台車の上にドサドサと載せる。

山口さんの事を考えると胸が苦しい。

(これって、やっぱり……)

私は、あの紅茶の王子様に恋をしてしまったのだろう。

幼い頃の甘酸っぱい初恋とは少し違う、大人としての恋を……

身分違いの恋だし、成就するはずもないと思う。

でも、せっかく芽生えたこの温かい気持ちを、今は大切にしたい。

(また、あの喫茶店でアフタヌンティーと一緒に飲みたいなあ……)

紅茶を楽しみながら、時間を忘れて語り合える相手。そう簡単にできるものではないと思う。今まで私の前には、そういう人は現れなかった。

一緒にいて心から楽しいと思えたのは、山口さんだけ。

(はあ……もう一度話すチャンスが欲しいなあ)

明日、山口さんは出張に行くと聞いている。

(明日は、直接顔を見ることができないのか)

それだけで、かなりブルーな気分になる。

なかなか思うようにしゃべることができないけれど、彼がデスクに座っている姿を目にするだけで、私の心は癒される。

廊下を歩いている時、ばったり会うかもしれないなんて期待して、ドキドキすることもある。

それは楽しいようで、ちょっと苦しい。

恋って、人を複雑な心境に追い込むんだな……

3 別の顔

その週はあつという間に過ぎて、金曜日になった。今日は、「山口さんを歓迎する会」が開催される。

だけど幹事役の伊藤さんに急な予定が入ってしまった、来られないらしい。そしてどういうわけか、私にその代役がまわってきてしまった。

「え、私……幹事なんてできませんよ」

「大丈夫。さっき、今日の会のレジュメを送っておいたから。幹事なんて簡単だよ」

「……」

気軽にそんなことを言われても、酔ってる人からお金を徴収するのって結構大変なのに。

事前に会費を払ってくれる人もいる。ただ、ほとんどの人は仕事で遅くなって途中参加になるのだ。そして最後にはその人たちがデロデロに酔っ払ってしまって、会費を集める人が四苦八苦する。そんな飲み会を何度も見てきた。

「……本当に私にできますかね？」

「ああ、大丈夫だよ。でも、ひとつ重要な注意事項があるんだ」

伊藤さんは深刻な顔をして、声をひそめた。

「注意事項？」

「山口さんは、アルコールが一滴も飲めないんだ」

「え、そうなんですか？」

「うん。だから彼にお酒を飲ませようとする人がいないように見張っててくれないかな？」

確かに、アフタヌーンティーの似合う山口さんが顔を赤くして酔っている姿は想像できない。

ただ、一滴もつていうのは、ちょっと意外。

「じゃあ、ウーロン茶とかにした方がいいんですかね」

「うん。ジュース類も好きじゃないみたいだから、くれぐれも注意してね」

「わかりました」

ジュースを頼んでしまったところで、山口さんは怒りを外に出すような人じゃないだろう。でも周囲は彼に相当気を使っているみたいだ。

結局、幹事をやることになってしまった。多少不安もあったけど、仕事に戻ったらスイッチを切り替える。今日も大量の書類の山の中で、私は必死に頑張った。